

大河下

シテ 河伯

ワキ 瀬波の領主勝間某

ワキツレ 里人

トモ 勝間の臣

所 周防瀬波川

ワキ「是は周防の国の住人。勝間の何某にて候。扱も此
国と申は。海浦の浪風あらふして。沙多く打揚磯
山と成て。其後は浦風もたゝず候。去ば往昔は沿
防と申候を。今は周防と改め候。又爰に瀬波川と
申て大河の候。いつも大雨の折ふし水かさまさり。
田畠損亡により。万民のなげき不便に存候間。土
民共に申付瀬波川を切下し。海へ落し。耕作豊か
になさばやと存候。いかに誰か有。シカぐ

ワキ「皆々国中の者に瀬波川へ出よと申付候へ。

トモ「畏て候。

ツレ、二人「扱も領主の御ふれとて。国中の面々仰に随ひ。上
六十下八十五を限つて。鋤鍬やうの器物を手々に
引さげ。我もくゝと瀬波川にこそ出にけれ。

歌「是はひとへに農業の。くゝ。豊かにありてたなつ
もの。みのりの為ときくなれば。諫みをなして出
にけり。くゝ。

シテ「喃々あれ成人々。何とて其堤をば切おとし給ふぞ。

ワキ「さん候。此瀬波川の。海へも他国へも落ず。たゞ

国を廻り。大雨の折ふしは水まさり。農事の障と

成候故。此堤を切。海へ水を落とし候。

シテ「尤仰はさる事なれ共。昔より此河を他国へ落す事

もなきに。今あらたに落さんとは。心得がたきい

ひ事哉。

ワキ「不思議やな。見れば童子の姿にて。堤を切をあら

そひいなむ。

詞「そも汝はいかなる者ぞ。

シテ「今は何をかつゝむべき。我は此川に年経て住る河

伯士也。我独りのみに非ず。門葉広く数多眷属あ

り。代々を重て爰に住り。我いふ事を用ひずして。

堤をはなし水を落さば。人民にたゞりて命を取べ

し。かまへて堤を切開き。後悔すなと気色をかへ。

同「さもみやびたる童形の。く。其様はやく変じ

つゝ。面さながら沙丹塗の。軒の瓦の鬼と成。あたりを払ひ冷じき姿と成て。其儘河浪に入にけり。

河瀬の波に入にけり。(中人)

ワキ「ふしぎや今の童形。顔色かはり鬼神と成て。堤を

制する有様也。然れ共かれは異形のなす業。殊に河伯が事なれば。何程の事か有べきなれども。若も此事さはりとならば。万民の悲しみも不便に候へば。当国一の宮玉祖の神に。祈誓かけばやと存

候。勝間の何某。急ぎ神前に参り膝まづき。幣とりあへず逆手をうつて頓首し。仰ぎ願はくば。此度瀬波河の水を難なく切くださしめ。国の農業を安穩に守らせ給へ。寸善尺魔の河伯がたゝりを。他方へ退けおはしませと。丹誠をこらす。南無歸命頂礼玉祖の神。

里人カ、ル

「斯て時刻も移るとて。国中の諸民数百人。鉏鋤大籠石どうつき。思ひくゝに用意して。曳声を出し

て瀬波川の。堤を切て水をくだす。実おびただしき有様かな。

同「あれく見よや瀬波川の。く。水上に河霧立ちらがつて。渦浪をめぐらす其内より。化したる者のあまた顕れ。堤のあたりを取かこみ。いかれる姿に肝をけし。鉏鋤器物をなげ捨て。皆ちりぐに逃さりけり。

同「かゝりければふしぎやな。佐波の府中の玉祖の。

社頭の方より白雲立て。神火飛ちり神通の鐺の音冷しく。瀬波川の堤の方へぞ飛行する。

シテ「其時河伯が眷属共。

同「其時河伯が眷属共。此神崇に恐れをなして。衆類を引つれ他方をさして退散すれば。人歩は悦び農具を以て。難なく堤を切ひらき。瀬波の大河を切くだし。耕作豊かに久堅の。天の玉祖威光を現じ。善哉々と詔命して上らせ給へば。いよく国民に

ぎわひて。く。栄ふる御代とぞ成にけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション 『古今謡曲解題』 丸岡桂 著
『宴曲十七帖 謡曲末百番』 国書刊行会 編